協和性を維持するための合唱演奏者間相互作用についての研究（1）―ポストCOVID-19時代における独唱・合唱のあり方についてのアンケート調査より―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学音楽学部 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石上, 浩美 メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/2000272

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

研究ノート

協和性を維持するための合唱演奏者間相互作用についての研究（1）

―ポスト COVID-19 時代における独唱・合唱のあり方についてのアンケート調査より―

石　上　浩　美

Study of Interaction between Choral Performers to Maintain Harmony（1）

Questionnaire survey on the ideal form of solo and chorus in the post- COVID-19 era

ISHIGAMI, Hiromi

1．問題と目的

2020 年 2 月以降、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）予防の観点から、音や音楽表現を取り巻く環境そのものが一変した。特に声楽・合唱においては、プロ・アマチュアを問わず、演奏行為・活動そのものが中止・延期を余儀なくされ、練習・教育においてもさまざまな制約を受ける中での模索という、かつてない状況がある。そこで本稿では、現在何らかの合唱活動に参加している歌い手・指導者を対象とした Web 質問紙調査結果から、ポスト COVID-19 時代における合唱の現状と課題を整理し、今後のあり方について考察することを目的とする。

学校教育課程における合唱の位置づけは、学習指導要領に示されている。 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編（2017）によると、音楽科の内容（領域）は、「A：表現」、「B：鑑賞」であり、合唱は「A：表現、項目（1）歌唱の活動」として位置づけられている。そして、「歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、歌唱表現を創意工夫」すること、「曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わり、声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり」について理解すること、「創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能」の 3 点が指導内容として明記され、その習得が教育目標となっている。一方、「B：鑑賞」においても、「曲想と音楽の構造との関わりを理解するとともに、曲や演奏に対する評価とその根拠を自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと」が目標になっている。これは合唱においても同様であり、美しい響きやハーモニー（協和的な音・音楽）を演奏するためには、発声法や表現技法を学ぶだけではなく「聴く力」も育む必要性もあるのではないだろうか。

田中（2014）によると、合唱（Chorus）とは「一人ひとりの歌声が集まってできるもの」であり、「その基本になるものは声楽」であるという。そして声楽とは、「自分のからだを楽器にして自由自在な息づかいで歌う」ことである。一方、本山・堀（2017）によると、「よい合唱」を行うために必要なものは、「周りの音を聴き、それに合わせて自分の音や発声を微調整でき

る聴覚と、それに随伴した身体の反応」であるという。

これらの言説をふまえるならば、合唱とは、複数の歌い手（player）の集合体（activity group）による、協和的な音の響き（sound）やハーモニー（harmony）づくりを目的とした音楽活動（concerted music activity）といえるだろう。それは、合唱には、正確な音程（interval）やピッチ（pitch）、独自の曲想感による発声だけではなく、他者や集団が発する声や音を聴きながら、それらと混じりあい、溶け込みあい、集団としてのひとつの響き、つまり協和的な音の響きを形成することが求められるためである。ここでいうピッチとは、「聴覚的な対象物のアイデンティティーを確立するための重要な手がかり、あるいはそれが確立された結果としての知覚印象（津崎、2019）」のことを指す。そして、個々の歌い手には、自分が発する声や音について、メタ的に聴きながら適宜微調整するための知識や技法も求められる。また、歌い手においては、楽曲に対する共通認識や、一定水準の音楽性を共有する必要があるだろう。すなわち合唱とは、複数の歌い手が発する異なる音や声を聴きながら、個々人が共通認識しているピッチ水準に合わせた声を創ることによって構成される協和的な音楽表現であり、それは自己調整学習方略（self-regulated learning）による協同学習（collaborative learning）であるといえるのではないだろうか。

たとえば器楽であれば、基本的には運指が正確であれば音は安定し、合奏者間での音のずれは運指の間違いであり、ピッチのずれはさほど問題にはならない。また、独唱の場合は自分が発した音や伴奏音をフィードバックしながら、それに合わせてピッチのずれを調整しながら表現する。ところが合唱では、歌い手個々人の発声を、集団のピッチに合わせる（個の埋没）ことによって、美しい響き（sound）やハーモニー（harmony）が構成されると考えられる。これは、理想的な音の協和に近づけば近づくほど、聴覚特性としては自分の声が聞こえにくく、ピッチが不安定になる（津崎；2013、2015）物理的な特性によるものである。そして、他の器楽演奏には見られない合唱特有の矛盾であり難しさでもある。だが、なぜそうなるのかは、音響学的にもまだ十分には検証されていない。

以上のことをふまえて、今後の研究計画では、1）「合唱」における響き（sound）やハーモニー（harmony）には、独唱とは異なるどのような音響的特徴があるのか、2）音楽科内容（領域）「A：表現」と「B：鑑賞」を融合し、「聴く力」を強化するための自己調整学習方略による合唱指導の探究、という 2 点について明らかにすることを目的とする。1）については、音楽心理学の立場から合唱音源の録音調査・実験と分析を試みる。また、2）については、小・中学校音楽科教育法の立場から、「表現」を主体とした従来型の合唱指導グループ（統制群）と、小松（2020）による「聴覚トレーニング方略」を用いたグループ（実験群）による同一楽曲録音音源の比較調査・分析を行う。そして、合唱という誰もが気軽に取り組める音楽的行為の「社会―歴史・文化的意義」を改めて問い直し、学校教育および生涯学習における合唱の意義と可能性、最終的には、「聴覚トレーニング方略による合唱指導モデル」を構築することを目指して

いる。

そこで本稿では、今後の研究計画進捗のための第一段階として、現在合唱環境を取り巻く現状と課題を整理する。

2. 方法

2-1　調査目的および期間

本調査の目的は、現在何らかの合唱活動に参加している歌い手・指導者を対象としたWeb質問紙調査結果から、ポストCOVID-19時代における合唱の現状と課題を整理し、これからの今後のあり方について考察することである。そこで以下の期間でWeb質問紙調査を実施した。

調査実施期間：2020年5月23日（土）から6月13日（土）

2-2　調査対象者および人権上の配慮

一般大学および芸術系大学の音楽専攻学生・院生、社会人合唱愛好家、教員、アマチュア合唱指導者など、現在何らかの合唱活動に参加している歌い手･指導者200名を調査対象とした。まず、K大学大学院音楽研究科院生の協力の下、Google Form を用いてWeb質問紙調査サンプルを作成した。そして、プロ・アマチュア合唱の歌い手・指導者10名程度に協力を依頼し、質問項目の妥当性を検討・修正を行った（2020年4月下旬から5月上旬）。その後、K大学音楽学部学生・大学院音楽研究科院生および教員、予備調査協力者を通じて調査対象者を募り、本調査を行った。

なお、調査データの信頼性を担保するため、SNSなどでの不特定多数への拡散は行わなかった。本調査フォーム見出しには、本調査の目的、匿名性の担保と守秘義務、個人情報保護に対する配慮についての文章を明記した。

2-3　調査手続き

Google Form を用いた定量・定性質問紙調査を行った。自由記述の分析は、User Local AI テキストマイニングを用いた作図（ワードクラウド）および共通する単語の共起関係（共起ネットワーク）を示した。ここでいう共起とは、1文中に類似した複数の単語が同時に出現することを指している。ワードクラウドは、複数回答者による自由記述文中から共通する単語を抽出し、その出現率（ワードクラウドスコア）が高い単語（名詞、動詞、形容詞、感動詞）を複数選び出したものである。また、共起ネットワークは、単語の出現パターンに類似性があるものを直線で結び、出現数が多い単語ほど大きく、共起の程度が強いほど太い線で描画したものである。

3. 結果と考察

調査期間中に得られた回答数は 203 件だったが、そのうち 3 件はデータ上の瑕疵があったため除外し、200 件を分析対象とした。以下、項目別にその結果を示す。なお、性別項目に関しては人権上の配慮を行った。

3-1　性別・年齢構成（必須）

有効回答数は 200 件であった。その実数（比率）は男性:63 名（31.5%）、女性:134 名（67%）、無回答：3 名（1.5%）であった。年齢構成は 20 歳未満、20 歳以上 39 歳以下、40 歳以上 59 歳以下、60 歳以上の 4 区分とし、その比率はそれぞれ 6 名（3%）、33 名（16.5%）、111 名（55.5%）、50 名（25%）であった。

Table.1　調査協力者の性別・年齢構成

	男性	女性	無回答	合計
20 歳未満	2	4	0	6
20 歳～ 39 歳	14	18	1	33
40 歳～ 59 歳	27	83	1	111
60 歳以上	20	29	1	50
合計	63	134	3	200

3-2　音楽活動実態属性（必須）

有効回答数は 200 件であった。その実数（比率）は、歌い手（独唱中心）：70 名（35%）、歌い手（合唱中心）:152 名（76%）、教諭・指揮者:18 名（9%）、民間教育指導者:27 名（13.5%）、その他：18 名（9%）であった。教諭には音楽科以外の科目も含まれていた。

Table.2　調査協力者の音楽活動属性

歌い手（独唱）	70
歌い手（合唱）	152
教諭 / 指揮者	18
民間教育指導者	27
その他	18
	285

3-3　現在の取り組みについて（歌い手）【複数回答可】

有効回答数は 270 件であった。その実数(比率)は、1) 自宅一人で練習している :133 名(49%)、2）Web 会議システムを使って複数名で自主的に練習している :27 名（9%）、3）Web 会議システムを使って指導者から個人レッスンを受けている：25 名（5%）、4）Web 会議システムを使って指導者にグループでレッスンを受けている：14 名（5%）、5）Web 会議システムを使ってリモート演奏を行い Youtube などで配信している：30 名（11%）、特に何も行っていない：

41 名（15%）であった。

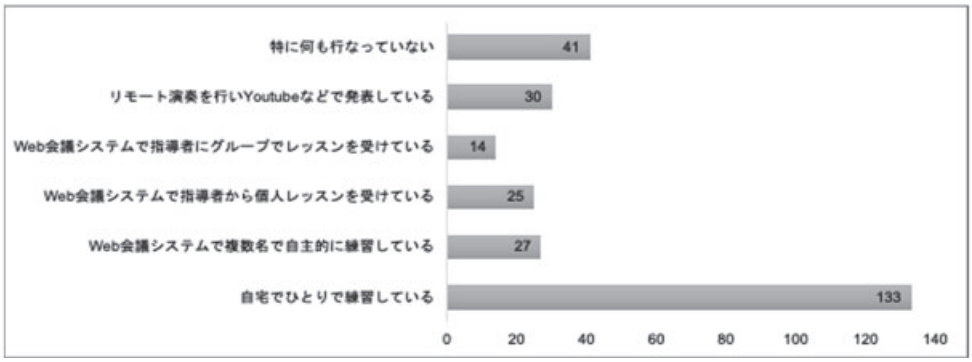

Figure.1　現在の取り組みについて（歌い手　2020/06 現在）

3-4　今後の計画（歌い手）【複数回答可】

有効回答数は 369 件であった。その実数（比率）は、1）引き続き自宅で一人練習を行う：90 名(24%)、2)引き続き Web 会議システムを使って複数名で自主的に練習を行う:20 名(5%)、3）引き続き Web 会議システムを使って指導者から個人レッスンを受ける：16 名（4%)、4）引き続き Web 会議システムを使って指導者にグループでレッスンを受ける：14 名（4%)、5）感染予防対策に留意しながら少人数グループ練習に参加する：61 名（17%)、6）感染予防対策に留意しながら通常規模の練習に参加する 52 名（14%)、7）感染予防対策に留意しながら構成規模を縮小した少人数編成演奏会に参加する：23 名（6%)、8）感染予防対策に留意しながら縮小構成規模･編成による演奏会に参加する:47 名（13%)、9）未定:46 名（12%）であった。

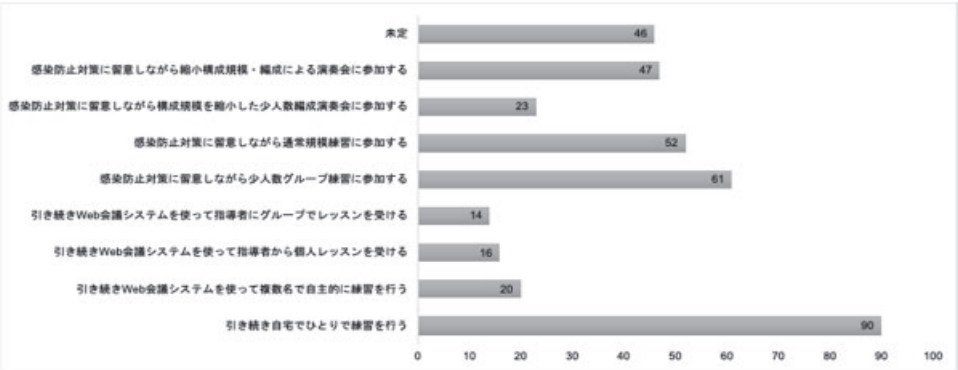

Figure.2　今後の計画について（歌い手　2020/06 現在）

3-5　現在の取り組み（教諭・指揮者など）【複数回答可】

有効回答数は104件であった。その実数（比率）比率は、1）自宅や職場などで指導のための準備・研究を行なっている：30名（29%）、2）Web会議システムを使って個人レッスンを行なっている:11名（11%）、3）Web会議システムを使ってグループレッスンを行なっている:7名（7%）、4）Web会議システム以外の方法で個人／グループでレッスンを行なっている：8名（8%）、5）Web会議システムを使ってリモート演奏を行いYou tubeなどで発表している：20名（19%）、6）特に何も行っていない：28名（27%）であった。

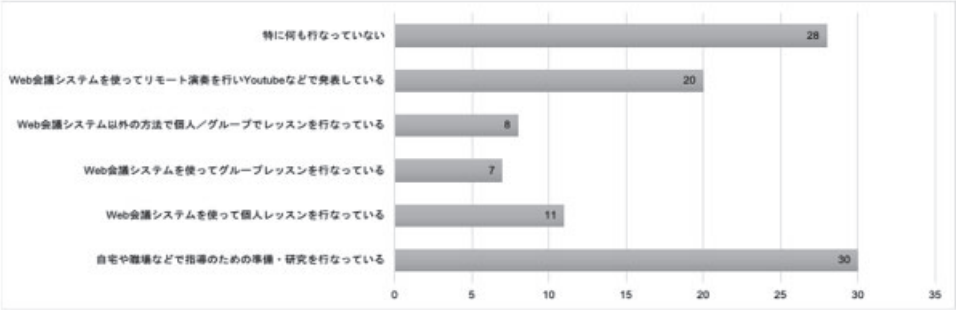

Figure.3　現在の取り組みについて（教諭・指揮者など　2020/06現在）

3-6　今後の計画（教諭・指揮者など）【複数回答可】

有効回答数は138件であった。その実数（比率）比率は、1）引き続き自宅や職場などで指導のための準備・研究を行う：26名（19%）、2）引き続きWeb会議システムを使って個人レッスンを行う：9名（7%）、3）引き続きWeb会議システムを使ってグループレッスンを行う：8名（8%）、4）引き続きWeb会議システムを使ってリモート演奏を行いYou tubeなどで発表する：12名（9%）、5）感染防止対策に留意しながら少人数グループで参集し、練習を行う：26名（19%）、6）感染防止対策に留意しながら通常規模で参集し、練習を行う：14名（10%）、7）感染防止対策に留意しながらメンバー構成規模を縮小し少人数編成による演奏会を行う：11名（8%）、8）感染防止対策に留意しながら通常構成規模による編成で演奏会を行う：9名（7%）、9）未定：24名（17%）であった。

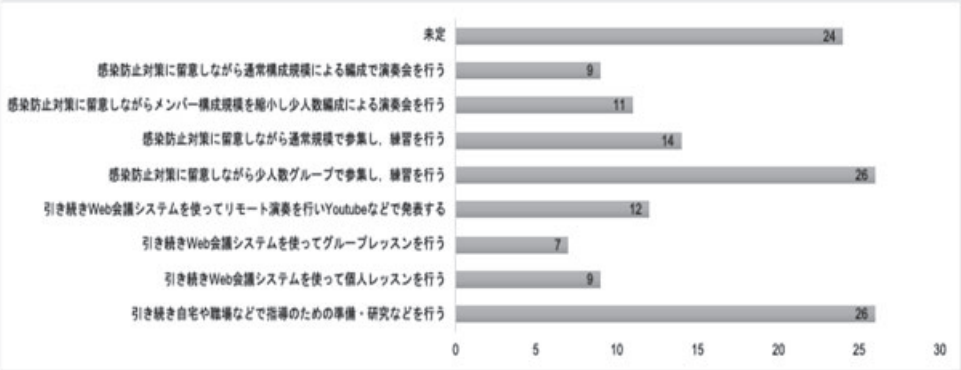

Figure.4　今後の計画について（教諭・指揮者など　2020/06 現在）

3-7　今後の計画についての理由（任意：自由記述）

ワードクラウドの中心に「合唱」があり、その周辺に配置（スコア高）されている単語の中で最もスコアが高かったものは「感染」であった。これは、本調査実施時点では、合唱行為そのものが感染ハイリスク行為と認識されているのかもしれない。ポジティブ項目スコアでは、「歌う（歌える）・少人数・練習・レッスン・リモート（Web/Zoom）・換気・自宅」などが高く、個々に対応を工夫しながら、現在の活動を継続している理由が示された。また、ネガティブ項目スコアでは、「コロナ・招きやすい・難しい・やむをえない」など、現在活動を停止・中断している理由が示された（Figure.5）。

一方、共起キーワードは全体的に拡散し、現状に対する戸惑いが示された。それは、「練習」に関連して「再開」を期待するものの、流行状況をふまえまだ「早い」という判断や、「少人数・会場」など、物理的制約による意欲や活動が抑制されていることを表している（Figure.6）。その一例として、以下、自由記述の中から代表的なものを示す。

・はっきりするまでは何に注意をしたらよいかがわからず外出には抵抗感があるため自宅練習しか考えられない。
・200 名以上の団員が所属し年配の方が多いため一度に全員参加は（現状では）とても危険だと考える。
・現時点で安全な方法が確立していないため、集まっての練習や本番は危険だと感じる。
・リモート練習に関しては音のずれなどがあり積極的に参加したいとは思わない。
・Web 会議システムだと声を合わせる感覚が微妙で、団員全員がそれを使える状況でもない。
・感染者数の増減を日々気にしながら、柔軟な対応となるでしょう。

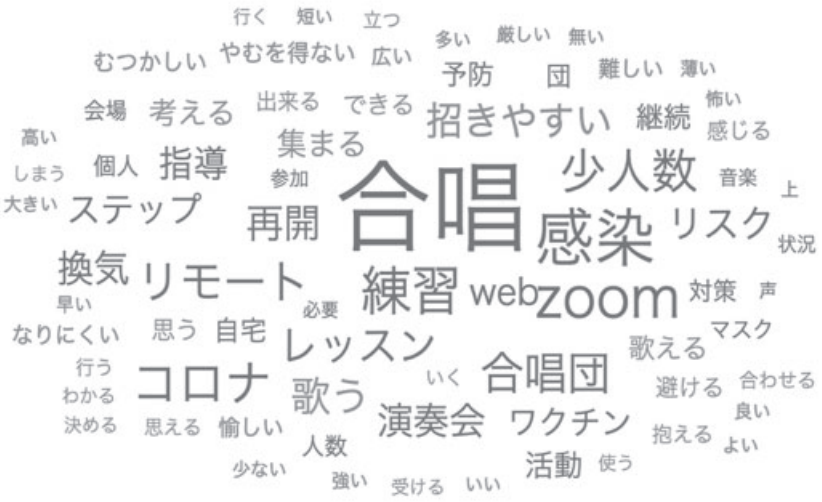

Figure.5　今後の計画についての理由（ワードクラウド）

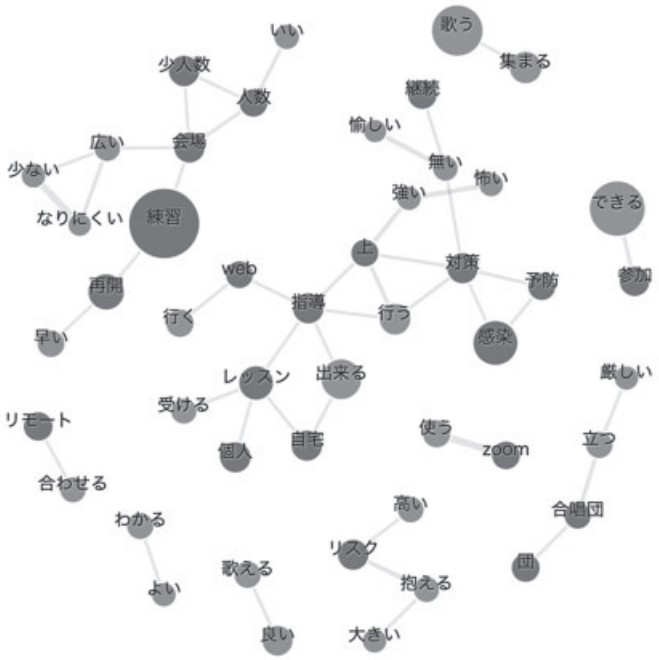

Figure.6　今後の計画についての理由（共起キーワード）

3-8　これからの独唱・合唱のあり方や音楽教育・文化に対する意見（自由記述）

「3−7　今後の計画について」と同様に、ワードクラウドの中心は「合唱」があるものの、その周辺に配置（スコア高）されている単語のスコアに突出したものはなく、「コロナ・感染・音楽・合唱団・再開・マスク・ワクチン」などが、ほぼ同水準であった。ポジティブ項目スコアでは、「歌う（歌える）・演奏・できる・活動・リモート・当面・文化」などが高く、合唱に対する歌い手や指導者の率直な思いが示された。また、ネガティブ項目スコアでは、「飛沫・当面・リスク」などが高く合唱行為そのものに対する慎重な姿勢が窺える（Figure.7）。

一方、共起キーワードは「思う」と「できる」に共起して「合唱・音楽・活動・工夫・文化」が示され、活動再開に対する期待や合唱そのものの意義や価値について省察していることが窺える（Figure.8）。

その一例として、以下、自由記述の中から代表的なものを示す。これら共通していることは、過去あたりまえのようにやっていた音楽的行為にのみ拘泥するのではなく、何らかの知恵と工夫によって合唱が可能になることへの期待、音楽そのものの文化的意義が示されている。

- 合唱はやはりお互いの声を聴きながら作り上げていくものなので、リモートでは限界あり（個人レッスンは可能）同じ空間で演奏することは不可欠。音楽には強いメッセージ力があり、祈り、癒やし、勇気、希望を与えられるものだろう。
- 音楽は苦しい時ほど必要なもの。
- 声を合わせて歌える日常が戻ることを切に願う。合唱はいちばん簡単に始められて誰でも楽しめる音楽のアンサンブル。また多くの学校では校内でのクラス単位の合唱コンクールが音楽教育を越えての学校行事として位置づけられている。このような合唱文化が廃れていくことがないようにと願うばかりだが、今まで通りの合唱が安心して楽しめるようになるには、もう暫くかかりそうなので、それまでは、何か代わりの練習や演奏の方法を試行錯誤しながら工夫するしかないかも。
- 歌のない世界は考えられない。感染防止を行いのながら活動する必要がある。舌の上でウイルスが増殖するという研究も報告されている。それならば、練習前に必ず口腔ケアを行って望む、水分をこまめにとる等が必要だ。練習場所に入る人数をある程度制限する必要があるかもしれないが、Webとの併用もありだ。体調の自己管理が今まで以上に必要になる。
- 人間の命を守るためとはいえ、合唱するにも距離を取らねばならないのは、そもそも（合唱）の否定に繋がっている。そもそも合唱や合奏は肉体を使っての表現活動で、しかも一人ではできない。だが、室内合唱はウイルスの温床となるので当面は再開が難しい。インフルエンザ並みに共存できる日が来るまで、合唱は不自由を強いられると覚悟しなければならない。今流行り始めているリモートコーラスなど遠隔での活動は、近未来的で将来を予感させるものである。みんな画像や声を聴くことで擬似的に合唱していることは脳の進化だ。しかし完全にとって代わるまでには、まだ時間はかかるだろう。それまでに先述のような共存が成立し、コロナ以前の環境に戻れる可能性も残されている。そのような不確実な時代には、音楽は個人のものになるのかもしれない。個人の練習は合唱や合奏に比べ取り組みやすくなっている。合唱も個人の声の集合体。一人一人の技量を上げる、感性を磨くなど、合唱にまつわるすべてのレベルアップを個人でもてきる範囲に集中させ、その後に可能となるであろう、集団活動の時期に備えてもらえたらよい。このことはこれまでなら音大生やプロの音楽家に課されていたことであったと思うが、アマチュア合唱人やアマチュア音楽家にも広がるような動きがあることで、日本における音楽文化がしぼむことなく生き残るのではないかと。
- 音楽文化は成熟した社会、人間らしさの証ゆえ、灯を消さずに伝えてゆかねばならない。ただし、従来の形式に拘るあまり、社会が受け入れない形にならぬよう、発想は柔軟に考えることも時に必要だ。

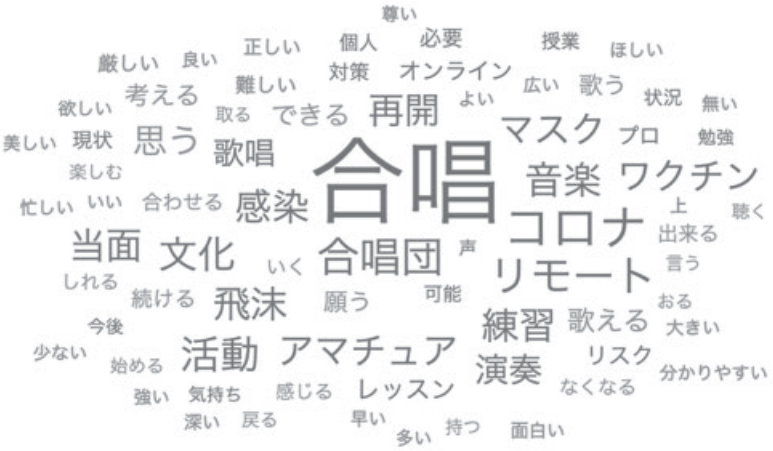

Figure.7　これからの独唱・合唱のあり方や音楽教育・文化に対する意見（ワードクラウド）

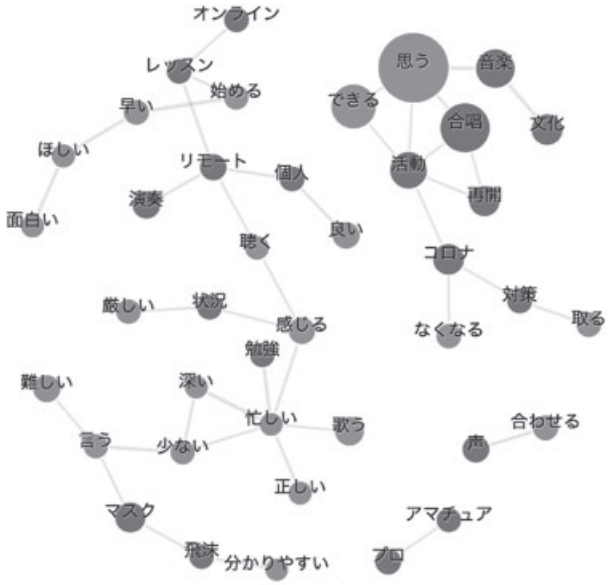

Figure.8　これからの独唱・合唱のあり方や音楽教育・文化に対する意見（共起キーワード）

4. 今後の課題

2020 年 2 月以降、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の全世界的な流行期にあり、新型コロナウイルス感染症専門家会議は 5 月 4 日、感染拡大予防のための「新しい生活様式」を提言した。これをふまえて、新型コロナウイルス感染症対策本部長（内閣総理大臣）は、4 月 7 日発出済「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（以下緊急事態宣言）」を 5 月 31 日まで延長した（その後一部地域は部分的解除）。この措置によって、感染症予防の観点から、個人や集団、学校教育場面における音楽的行為そのものが著しく制限され、学校教育をはじめ、プロ・アマチュアを問わず、ほぼすべての音楽活動・表現が停止するという、これまでにはあり得なかったことが起こった。特に歌唱・合唱は、飛沫感染リスクが高い活動として、学校教育課程内外において見直しを余儀なくされた。その状況は現在においても継続中である。「緊急事態宣言」解除後、2020 年 7 月以降は各地で、感染予防のための創意工夫を凝らした合唱練習や一部演奏会が再開された。だが、その実施判断・責任は活動主催団体に委ねられているため、活動再開を躊躇する団体や個人がいるのも当然のことである。このような現状の長期化によって、音楽文化そのものが衰退するのではないかという懸念もある。

文部科学省は「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル－学校の新しい生活様式－（2020.9.3Ver.4）」（2020）を発表した。このマニュアルの「第 3 章具体的な活動場面ごとの感染症予防対策について、1. 各教科について」では、「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」は「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動」と明記されている。これをふまえて、各学校音楽科においては、年間指導計画および内容を見直し、感染状況レベルに応じた感染予防対策を講じ、工夫・改善を試行錯誤しながら行っている。

一方、内閣総理大臣は、「新型インフルエンザ等対策特別措置法」第 32 条第 1 項規定に基づき「緊急事態措置宣言（以下「宣言」とする）」を発令し、国民生活および社会・経済に甚大なる影響を与えた。ただし、すでに「宣言」発令以前から、多くの演奏会が中止・延期を余儀なくされ、学校教育現場においては休校・休講措置がなされた。生涯教育施設においても、施設の閉鎖・利用制限が相次いだ。この措置は、音楽ホールや合唱練習の場となる公共・民間施設においても同様であり、プロ・アマチュアを問わず、音楽・芸術活動家は、表現活動そのものの場を失うという状況に陥った。

本稿では、このような状況における声楽家や合唱愛好家の現状や想いを調査・分析することを試みた。それは、ポストコロナ時代における合唱および歌唱指導のあり方、合唱の社会文化的価値について考えることは急務であると考えたためである。今後は、今回と同一質問項目による Web 質問紙調査を再度実施し、縦断的な比較・検討を行う予定である。

5. 謝辞

本稿調査を実施経費の一部は、京都市「新型コロナウイルス感染症の影響に伴う京都市文化芸術活動緊急奨励金」の支援を受けた。また、本稿執筆にあたっては、京都市立芸術大学音楽学部津崎実教授をはじめ、同学生・院生、社会人合唱愛好家、教員、アマチュア合唱指導者など多数の方々に協力いただいた。ここに改めて御礼申し上げる。

引用文献

小松正史　2020 「ひらめく直感力をぐんぐん鍛える耳トレ！ドリル〔CD 付〕」ヤマハミュージックメディア、10-15.

本山秀穀・堀雄紀　2017 「喝采、その日その日。うたごころの現場から」 パナムジカ、8-9.

文部科学省　2017 「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説音楽編」 教育芸術社 pp.37-42.

田中信昭　2014 「絶対うまくなる合唱 100 のコツ」 ヤマハミュージックメディア、3-6.

津崎実　2019 「ピッチ知覚の研究ってむずかしいの？」 音楽知覚認知研究 24（2）、75-96

M. Tsuzaki, H. Ohmori, H. Ue, and S. Kuga, “The precision of fundamental frequencies of vocal performances with the parallel voice by the perfect fifth: A comparison to the major third,” in International Symposium on Performance Science 2015, Kyoto, Japan, 2015/09/02-05 2015, pp. 59-60.

M. Tsuzaki, H. Ue, T. Orie, and T. Kohama, “Effects of physical training on the stability of operatic singing: Acoustical analyses and physical measurements after isometrics,” in International Symposium on Performance Science, Vienna, 2013: AEC, pp. 541-546.